

[令和5年度] 第6回 飯田市新文化会館検討委員会 会議録

会議名称	第6回 飯田市新文化会館整備検討委員会
開催日時	令和5年5月19日(金) 午後7時～午後9時2分
開催場所	飯田市公民館（ムトスぷらざ） 多目的ホール
出席委員 (敬称略)	片桐啓、上沼俊彦、川崎好昭、塩澤哲夫、高松和子、原田雅弘、 黒河内智子、高山和夫、飯島剛、桑原利彦、佐々木祥二、小木曾俊夫、 森本典子、小澤櫻作、佐々木宏幸、山元浩
欠席委員 (敬称略)	田中悦雄、遠山あづみ、前澤正徳
オブザーバー (敬称略)	井坪隆
出席事務局職員	教育委員会 教育次長：秦野高彦、統括支援担当専門主査：松下徹 文化会館 館長：下井善彦 館長補佐兼文化会館建設担当専門主査：筒井文彦 管理係：係長熊谷誉司成、和田健太郎 事業係：係長木村喜宣、白井美樹、中島弘貴 人形劇のまちづくり係：係長山崎良二
会議の概要	<p>1 開会</p> <p>2 令和5年度の委員会・事務局</p> <p>3 議事</p> <p>(1) 前回の振り返り【配布資料No.1、ニュースレター第4号】 今後の進め方【配布資料No.2】</p> <p>(2) 意見交換（ワークショップ）【資料No.3】 「新しい文化会館の基本構想に向けて」 テーマ：飯田らしい表現活動とは ～これまでとこれから～</p> <p>○話題提供</p> <p>(1) これまでの飯田の表現活動</p> <p>(2) 新しい時代の公立劇場に必要な多様な表現活動とは (上田市や全国の事例から)【資料No.4】</p> <p>○班別意見交換、発表、全体意見交換 「飯田らしい表現活動とは何か」</p> <p>【班編成】</p> <p>1班(4名) 塩澤、高山、佐々木、白井</p> <p>2班(3名) 川崎、桑原、山元、中島</p> <p>3班(4名) 飯島、黒河内、原田、小澤、木村</p> <p>4班(4名) 小木曾、佐々木、高松、秦野、山崎</p> <p>5班(4名) 片桐、上沼、森本、下井、熊谷</p> <p>4 事務連絡</p> <p>5 閉会</p>

※次ページ以降の会議録（発言）には委員の氏名を掲載いたしません。

---

## 1 開 会

○委員長 めちゃくちゃ暑い中、最中でちょっと涼しくなった1日でしたけれども、足元が悪い中お集まりいただきありがとうございます。

本日、田中委員さん、前澤委員さん、遠山委員さんから欠席のご連絡がありましたので、ご報告させていただきます。

---

## 2 令和5年度の委員会・事務局

○委員長 次に委員会の議事に入る前に、令和5年度の委員会・事務局の体制について確認させていただきます。

次第の裏面の委員会名簿をご覧ください。

新年度の切り替えに伴って、名簿の9番の飯田市校長会の会長に高陵中学校の高山校長先生が就任されております。また、12番の飯田市公民館館長会の会長に飯田市公民館長であり、羽場公民館の佐々木館長さんが就任されております。

飯田市新文化会館整備検討委員会要綱の第3条に則って、それぞれ前任者の残任期間において、委員としてお願いすることになりました。ご承知おきください。

なお、17番の〇〇学識委員さんですが、昨年度末で上田市のサントミューゼを退任されましたが、全国各地のホールに関わっていらっしゃいます。現時点で代表的な役職を記載させていただきました。お願いします。

それでは突然で申し訳ないのですが、今年度から委員に委嘱されたお二方から自己紹介をお願いしたいと思います。

初めに高山先生お願いします。

○高山委員 それでは皆さんこんばんは。

今、ご紹介いただきました高陵中学校の校長の高山和夫と申します。

前任の飯田東中学校、賜 正俊校長先生の後を継いでお世話になりますが、どうかよろしく願いいたします。

○委員長 ありがとうございます。

続いて、佐々木館長お願いします。

○佐々木祥二委員 皆さん、こんばんは。

今年の4月から飯田市公民館の館長会の会長になりました羽場公民館の佐々木祥二と申します。よろしく願いいたします。

○委員長 ありがとうございます。

続いて事務局に関しても、4月の人事異動によって秦野教育次長、熊谷管理係長、和田主査が着任されております。また、参与であった松下さんは、教育委員会の統括支援担当として、引き続き担当されます。

新たに事務局担当となられた皆さんに自己紹介をお願いします。

秦野次長からお願いします。

○秦野（事務局） こんにちは。

教育次長を拝命しました秦野でございます。よろしくお願いいたします。

前任は、ここの飯田市公民館の副館長をしていて、この移転のときに役職をさせていただいておりました。どうぞよろしくお願いいたします。

○委員長 続いて熊谷係長をお願いします。

○熊谷 こんにちは。

飯田文化会館の管理係長になりました熊谷と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

○委員長 ありがとうございます。

続いて和田主査をお願いします。

○和田 こんにちは。

後ろから失礼します。この4月から文化会館に配属となりました和田健太郎と申します。3月までは広報いいたの編集発行を担当しておりましたので、本日ここにお見えの皆さんには何かとお世話になったかと思いますが、これからは文化会館でお世話になります。どうぞよろしくお願いいたします。

○委員長 ありがとうございます。

---

## 2 議 事

○委員長 それでは早速ですが議事に入ります。

---

### (1) 前回の振り返り・今後の進め方

○委員長 初めに(1)前回の振り返り・今後の進め方について、事務局から説明をお願いします。

○下井（事務局）、今年もまたお願いしたいと思いますが、文化会館の下井と申します。引き続きよろしくをお願いします。

それでは説明に入る前に、本日の資料の確認をお願いしたいと思います。

まず、次第でホッチキスで留めたものがございますが、その裏に資料ナンバー1・2・3というのがついております。説明はまたそのつど行います。

それから、別冊で資料ナンバー4、それから意見交換シート、それからさらにアンケート報告様式がいつものごとくついておりますのでご確認ください。

それでは初めに、資料ナンバー1の「今後の進め方について」、秦野次長から説明をいたします。

○秦野（事務局） それでは資料ナンバー1をご覧くださいと思います。

昨年の6月に整備検討委員会が設置されまして、年度の前半は基本理念をまとめるための議論を重ねていただいております。仮の基本理念がまとまりまして、11月には、リニア時代の新しい文化会館のあり方についての学習会を開催して、それらを踏まえて、前回の第5回の委員会では、舞台芸術の視点と地域づくりの視点から考える飯田らしい「公立劇場の役割」について意見交換をしていただいております。

本日の第6回につきましては、新しい文化会館の基本構想に向けて、前回の委員会での意見をさらに深めるために、「飯田らしい表現活動とは何か」について、ワークショップの手法を用いて、様々なご意見をいただきたいと思いますと考えております。また、〇〇委員と〇〇委員から話題提供という

ことで、飯田らしい表現活動の「これまで」と「これから」についてお話いただきます。

今回の第7回についても、引き続き基本構想についての検討として、施設整備の考え方についてご意見をいただきたいと考えております。

なお、基本構想の後には、基本計画をつくる作業になりますが、基本計画については、より具体的な施設規模や設備を含めた機能、概算事業費や事業スケジュールなど具体的な計画といったものになってまいります。

繰り返しになりますけれども、基本構想は基本理念を基にした事業のあり方、施設整備の方向性、大きな考え方をまとめていただくという、まだその段階でございます。

また、基本理念にまとめていただいた「みんなが集い、創り 伝える 感動の飯田ひろば」を実現するために、立地に関する関心が高まっていることは理解しておりますが、建設候補地に関しては、理想を追求しながらも、その一方で法制度をクリアして、大きな面積を確保しなければならないという現実的な対応を伴うものであるため、市の責任において、調査・検討・判断を行っていかねばならない課題であると捉えております。現時点につきましては、特定のエリアを前提にした検討ができないという点につきましては、なにとぞご理解をいただきたいと思っております。

○下井（事務局） ありがとうございます。

それでは前回の振り返りということで、今日お手元にお配りしましたニュースレターの4号がございますので、まずここから入っていききたいと思います。

開いていただいて、左側のページの真ん中くらいから下くらいですかね。これは前回も共有させていただいたというふうに考えておりますけれども、基本理念は「みんなが集い、創り 伝える 感動の飯田ひろば」でございますが、「飯田ひろば」ということで舞台芸術の視点という我々がいつも持っているものに加えまして、地域づくりの視点もということでそこに書いてございます。そのページの一番下ですけれども、飯田らしさ、飯田とはどういうふうに考えたら良いかっていうことで「ひとを育み、まちを育み、活力を生み出す」と、こういうことでまとまってきたのかなあと思っております。

右側にはワークショップのことが書いてございますが、今日の資料のほう、レジメ、次第が書いてあるレジメのほうの資料ナンバー2をご覧くださいと思います。こちら先ほどのニュースレターと同じものがございますけれども、そこに大きく書いてございます。共有されたイメージとしては、「日常の中にある文化を介在して、人と人がつながっていく。地域の中で市民が文化的なものに巻き込まれていく」という「飯田らしい文化施設」ということでございました。

(3)でグループワークをしていただきまして、1班では「小さな日常」、それから奇しくも2班でも「非日常を取り巻く日常」というこういう意見がございました。3班が「人が集まりつながっていく」、4班、「楽しみが育つ場所」、5班は「まちとのつながり」ということで皆さんにご意見をいただいております。

説明は以上でありますけれども、前回のワークショップの進行役をお願いしました学識委員から補足をお願いできればなというふうに思いますが、いかがでしょうか。

○学識委員 皆さんこんばんは、本日もよろしく願いいたします。

非常にクリアにまとめていただいたと思います。

私自身も、本日の主な議題である基本構想案というものをどういうレベルに位置づけたら良い

のかっていうことを、今ちょっと説明をお伺いしながら考えていたんですけども、「みんなが集い、創り 伝える 感動の飯田ひろば」という基本理念。その基本理念の中にある「飯田」という「飯田らしさ」が今の「ひとを育み、まちを育み、活力を生み出す」という「飯田らしさ」の一つの考え方としてまとまっているということかなと思います。

本日の主な議題というのは、この「ひとを育み、まちを育み、活力を生み出す」ということに具体的ににつながる表現活動っていうものは、どういうものなんだっていう辺りのもう少し具体的なことを皆さんに良い議論をしていただくというのが本日の主な目的というふうに理解をいたしました。それがクリアになることで今度は第7回の施設の話、そういったものにつながっていくというふうに捉えております。

ですので、今日、〇〇委員と〇〇委員からそれぞれ専門的な立場で、これまでとこれからと飯田らしい表現活動というお話、あるいはほかの都市の事例についてお話がありますけれども、皆さんにそれを聞いていただくときには、そういったものの中で飯田らしい表現活動というのは、この今の理念と「ひとを育み、まちを育み、活力を生み出す」のもう少し先にある具体的なものは何なのかという辺りを考えながら聞いていただいて、それがラウンドテーブルディスカッションにつながっていくという流れが、本日の委員会の構成かなというふうに思っております。

本日もよろしく願いいたします。

私からは以上です。

○委員長 ありがとうございます。

ただいま(1)前回の振り返りと今後の進め方について、説明いただき、学識委員から補足をお願いいたしました。委員の皆さんにはご質問等ありましたらご発言をいただきたいと思っております。

発言される場合には、お手数ですが、挙手をしていただき、お名前をおっしゃってから、着座のまま結構ですので、ご発言いただくようお願いします。

どなたか質疑ありますでしょうか。よろしいですか。

(発言する者なし)

○委員長 はい、それでは先に進みます。

---

## (2) 意見交換(ワークショップ)

○委員長 続いて、(2)意見交換・ワークショップのほうに進みたいと思っておりますが、先ほどからお話に出ておりますように、本日は前回の議論をさらに深く掘り下げていただくために、〇〇委員と〇〇学識委員から「飯田らしい表現活動とはこれまでとこれから」というテーマで話題提供していただきます。

〇〇委員からは、「これまで」の飯田の表現活動について、〇〇学識委員からは、「これから」の表現活動についてをお話しいただきます。

次に、その話題提供を基に「飯田らしさ」について、各班で意見交換をしていただきますが、その前にお二人の話題提供を受けて論点の整理をしていただくために、学識委員にコーディネーター役をお願いしたいと思います。

その後、班ごとに意見交換をしていただき、班ごとでまた発表をしていただきたいと思います。

それでは、ステージの準備をしますので、少しお待ちください。

(舞台転換)

○下井(事務局) それでは、これから、話題提供というふうに入りますけれども、まず一旦、資料ナンバー3、次第の書いてあるものの5ページに当たりますけれども、資料ナンバー3をご覧いただきたいと思います。

これは、前回2月3日の日にお付けした資料と同じものですが、「飯田ひろば」ということで、そこに基本理念が上に大きく書いてございます。その下には30のキーワードがございまして、これ皆さんと話し合っているいろいろな出さっていただいた意見をまとめたものでございます。その下の囲みのほうに特徴的な例ということで、伊那谷文化芸術祭とかオケ友とか書いてございますが、これがいわゆる飯田で現実、今、行われている事業ということをここに列記したということでございます。

今日、まずは〇〇委員には、ぜひこの現状、飯田でやられているこういう事業と具体的にはオケ友であったり人形劇が代表的なものかもしれませんが、この辺りで話題提供をお願いできればと思います。

その後、〇〇委員からは上田の例になりますか、それから全国的な例というようなことでお話をいただければと思います。

準備がよろしいようでしたら始めたいと思いますが、いかがですか。

それでは、まずは〇〇委員からお願いしたいと思います。

○委員 どうも皆さん、こんばんは。〇〇でございます。

皆さん大変なメンバーがいる中で、私がこういうのをやるのはどうかと思ったんですが、事務局にお断りをしたんですが、なかなか許してもらえずに座らされてしまいましたので、よろしくお願ひいたします。

私は仕事として文化会館、あるいは美術博物館というところで関わってきましたので、その経験を基にして、ちょっと振り返りをするということでお話をさせていただきたいと思います。いつも話が下手でまとまらないことには自信がありますので、そのつもりでお聞きいただければと思います。

今日は話題提供ということなんですが、資料ナンバー3にあるような活動がどんなことやっているかっていうことをお話しても、皆さんのほうがお詳しいと思いますので、資料ナンバー2にあります、前回のときに出されましたキーワード、各班で出されたキーワードをきっかけにしながら今までの活動っていうか、今やってる活動を少し振り返ってみるということで、皆さんの検討の参考にしていただければと思います。よろしくお願ひいたします。

ちょっと座らせていただきます。

最初に、基本的なところで、「ひとづくり」、「まちづくり」ということがキーワードとしてまとまって、ずっと今までの検討委員会の中でも出てきたことだろうと思います。ご存じのとおり最初の頃、飯田下伊那にはいろんな民俗芸能があっずっと続いているねっていう、そういう素地があるんだということが共有されていたかと思いますが、新野の盆踊り、それから新野のではないんですが、郡上八幡の郡上踊り、同じ演目があるんですね。「かわさき」という演目だそうですが、これは「かわさき」という人の名前でも何でもなくて、紀州にある川崎というところで流行った踊り方を持ち込んだということのようです。

元々そういう踊りにしても、それから今田・黒田の人形浄瑠璃、それから大鹿や下條の地芝居、そういったものも元々から飯田にあったものではありませんので、そういうものを取り込んで、自分たちの暮らしの中に必要なものとして定着させてきたというのは、まさに日常の中にある文化を介在してというか、日常と文化をつなげて自分たちの心の豊かさというのを求めたり、あるいは厳しい自然の中での暮らしに潤いをということが、やってきた伝統があるのかなということで、振り返ってみております。

もちろん人形劇にしても、オケ友のクラシック音楽にしても、皆さんはいろいろ携わっているものも元から飯田の発祥ではないんですけども、それを自分たちのものにしていくっていう精神性があるというところを、まず押さえておきたいなというふうに思います。

私の経験から申し上げますと、人形劇カーニバルから、いい大人形劇フェスタになったとき、それからオケ友を立ち上げるときに、実は市民の皆さんがこうやって集まっているんな議論をしていただきました。その中で結局、理念としてまとまったのがそれぞれあるんですけども、真っ先にやっぱり出ているのが、それぞれのホームページ等、見ていただければ結構なんですけど、やっぱり「人を育て、まちをつくろう」っていうこと、文化を通じてそういうことをしていこうということが、自然と市民の皆さんの中でまとまってきたっていうのがあると思います。それが本当に私はそういうところに一緒にさせていただきまして、すごく感動したことでございます。まずそういうことで、この基本的なところは皆さんもう既にあれこれ言わなくても共有されている、まさにそれが「飯田らしさ」の一つのベースかなというふうに思います。

続いて、「小さな日常を取り込む」とか「人が集まり、つながっていく」というキーワードが出されています。フェスタやオケ友っていうのは、さっき言ったように、一つには文化のまちづくりというか、まちづくりを象徴するようなイベントで続いてきていると思うんですが、一方で一般の人から見ると「人形劇が好きな人」、あるいは「人形劇が子どもたちのもの」、それからオケ友にしても「クラシック好きの人たちが」というふうに見られているのは、普通にそういうふうにつけても良いのかなと思います。そこのところがこれからの活動の中で「小さな日常を取り込んだり」、「人が集まり、つながっていく」というときにもっと広がってほしいんじゃないかというのが、多分委員の皆さんの中にはすごくイメージというか、問題意識としてあるのかなというのがあると思います。いろんな伝統芸能にしても、やっぱり担い手をどうしていくかっていうか、みんながみんな担っているわけではないんですが、少しでも広めていこう、なければならぬというのが、多分今、必要な一つの課題としてなっている。そういうことをするためにどういう活動が必要かなっていうのを、これから皆さんで議論していくことが必要かなと私は感じております。

そういうときに人形劇にしてもいろんな活動、伊那谷文化芸術祭とか、いろんなところでもやっぱり学校の子どもたちをどう参加させるか、担い手にしていくかっていうのが真っ先に考えられることなんですけれども、実は学校の子どもたちを参加させたりっていうのは大変やっぱり難しいものがある。悪いことではないんですけども、やっぱり学校には学校の教育という目的がある中で、それを引き込んでくるというのは大変難しいところがあるということで、そのところをこれからどう開拓していくかなっていうところも、問題として感じていらっしゃるのかなというふうに思います。

ただ、スポーツの世界ではもう地域型スポーツクラブというような活動も出ていますので、決して文化も最終的には同じような形で、地域の中で子どもたちも一緒になってやっていけるんじゃないかなというふうには思いますけれども、それを具体化するにはどんなことが必要かなっていうところは、より突っ込んで考えていく必要があるかなと思うところでございます。

次に、「人が集まり、つながっていく、楽しみが育つ場所」としての文化会館というイメージがあるんですが、飯田には演劇宿という演劇集団がありまして、この地域のことを題材にしながら、お芝居をつくって年1回までは行ってないんですが、非常にいいお芝居を見せてくれています。この演劇宿なんですが、演出家の「ふじたあさや」さんが飯田へ稽古やいろいろなときにずっと滞在をして一緒につくっていくって活動がされています。こんなことは「人が集まり、つながっていく、楽しみが育つ場所」としてこれからもっとプロの皆さん、あるいはそういう専門家の皆さんとつながっていくことによって広がっていくっていうふうに、皆さんに明示されているのかなと思います。

フェスタにしても、オケ友にしても、やっぱりプロの皆さんが飯田に来ているわけですが、なかなか日常的なところには、まだまだ絶対ないとは言いませんけれども、つながっていない・広がっていないってところが、ちょっと悔しいなと思うところでございますが、そこら辺は、またいろいろ皆さんのお考えがあるのかなというふうに思っています。

例えば、オケ友なんかに参加している人から聞いたんですけど、「プロと一緒に練習しているクリニックというのがあるんですが、それに加えてほかの地域の音楽をやっている人たちも合宿したりしながら、一緒になって音楽を楽しめるような場所になっていくと、やっぱり飯田の良さっていうのがもっと広がっていくんじゃないかな、そんな企画がないかなあ」っていうようなことを聞いたことがあります。

また、人形劇でも竹田練場というのが座光寺にあるんですが、そこは人形芝居をつくるには非常に優れた設備と言いますか環境は整っていますけれども、そこで飯田発の人形劇、子ども向けだけではなく、いろんな人形劇がつかれるようなこと、活動ができたらいかなっていうようなアイデアも聞いたことがございます。そんなことが実現できる文化会館なり文化活動だと良いなというふうに思います。

ただ、実は、人形劇カーニバルから人形劇フェスタに転換するときに、プロの皆さんと行政とがなかなかうまく連携したりということが難しかったという経験がございまして。人形劇の状況もいろいろ変化がありますので、一概にどっちがどうということではないんですけども、プロ劇団とすれば、あるいは人形劇をやっている人たちとすれば、人形劇そのものを振興するために行政が直接何か応援をしてほしいというニーズがすごく強くなってしまって、一方、行政とすると行政はみんな市民の皆さんのためにいろんな活動するわけですから、人形劇のためだけに直接っていうのは難しいということで、いろいろせめぎ合いがあって、結果的に市民主体のいい人形劇フェスタという形で、人形劇をお神輿と言っては失礼かもしれませんが、そういう形で担いで、みんなで楽しんで広めていこうという形に変わったっていうことがありますので、プロの皆さんとコラボレーションと言っても、相手の皆さんがそういう活動に関心を持つかどうかっていうのもありますので、そこら辺を実際に飯田に来ていただきながら一緒にやる中で、分かっていたら良いかと。

オケ友なんかでは、本当に名フィルの皆さんが来て、気軽に市民の皆さんと交流したり、教え合ったりしていただいていますので、プロはプロだっていうことではないと思います。多分プロの皆さんの中にも地域の人とつながっていくっていうニーズ・必要性っていうのを、すごく感じていらっしゃる皆さんもいるのかなというふうに思っているところです。

最後のほうになりますけれども、「まちとのつながり」というキーワードがございます。最初に新野の盆踊りの話をしましたが、ユネスコの無形文化遺産に登録をされたのは皆さんご存じだと思いますが、その登録の要件の1つに、「まちとのつながり」というのがあります。これは具体的に言いますと、そこの地域の住民、行政、民間の企業といった周りの人たちが、いかにそれぞれができる力で支えていくか、ということがきちんとできないと登録しませんよっていうことなんですけれども、これなんか多分これから飯田でもっと文化が広がっていく上で、フェスタにしてもオケ友にしても、企業協賛とかいろいろな形で取り組んではいらっしゃいますけれども、もっと企業の皆さん、あるいは行政の支援のあり方っていうのについて、これからのまちづくりに資するようなものを考えていく必要があるのかなというふうに思っているところでございます。

最後に、1つだけなんですけれども、前回もちょっと分科会というか、各班のところで少し触れましたが、舞台芸術ではないんですが、先月、飯田市の美術博物館で「アーティストが触れた伊那谷展」というちょっと珍しい展覧会がございました。これは、今の先進の若手の実力のあるアーティストの皆さんを、伊那谷に呼んで、そこで感じたことを表現してもらい、作品にしてもらうっていうことをやって、それを展示したものです。作品の評価はいろいろあると思いますが、私も行ってみたいところ感じたのは、そのまま伊那谷のありのままがそれぞれのあれで表現されているってのはすごく感じました。

この活動、展覧会を企画したのは実は美術の周辺にいる人たち、作家の皆さんではなくて、大学の先生であったり、学芸員であったりって皆さんです。そういう人たちが企画をして、地域にプロを呼び込んで、その地域のことをまた違う目線から発信していくというような活動だったんですけれども、その企画者の1人、一番上に立っている人が、別に「最初は飯田でもなくても良かったんだよ」ということ言っているんですが、たまたまその方は、お父さん、お母さんが座光寺の出身で、東京生まれなんですけれども、「知らない土地じゃないんで最初にとっかかるには飯田かな」くらいのことだったようですけど、そういう縁者の人たちということもあるんですが、そういう企画をしていく専門的な人たちの存在っていうのが、これから飯田でも必要になるのかなということも思っています。

その展覧会について、日経新聞が論評をしていました。「大都市の中心の有名絵画の展示会に一石を投ずる」っていうような見出しだったんですが、大都市の美術館というのはご存じのとおり、有名なものを呼んで、多くの人に見てもらって、それで稼ぐということなんですけど、人口が減っていくとなると、なかなかそういう活動も厳しくなってくるんじゃないか。それは一方で、地方も人口が減るわけですが、今国交省辺りのコンサルが「10万人くらいの規模のところ、もっと分散していくと、緩やかでもきちんと持続可能な経営ができていくんじゃないか」、っていうようなことを提言しているってことがあります。

文化の面でちょっと話はつながらないかもしれませんが、人口が減るということは文化の担い手も減るといことなんです。つくる人が減れば、それを鑑賞する人も減るんですけれども、

そういった中で、これから必要になるのはまさに市民一人一人が文化の担い手として何らかの活動をしている。そんなまちになっていると、論語にありますように、古い言葉ですけれども、「近き者よろこび、遠き者来たる」というようなことにつながっているんじゃないかなというふうに思っているというところで、私のまとまらない話題提供を終わりにさせていただきます。どうもありがとうございました。

(拍手)

○下井(事務局) ○○委員、ありがとうございました。

続いて、学識委員の○○さんに話題提供なんですけど、○○さんはプロジェクターですが、準備のほうは大丈夫ですかね。

○○さんには、飯田の事例を引いていただいて、課題整理にもつなげていただいたかなと思います。

それでは、○○委員のほうにバトンタッチして、話題提供をお願いしたいと思います。

○委員 皆様。お久しぶりです。○○です。今回もよろしくお願ひいたします。

今回、私、上田からではなくて、自宅のある兵庫県の尼崎からまいりまして、実は上田から来るよりも尼崎から来るほうが断然早く到着した。やっぱり新幹線は速いなあと思ったんですけど、リニアモーターカーのほうがもっと速いですから楽しみだなと改めて思ったところです。

私からは、「新しい時代の公立劇場に必要な多様な表現活動とは」というお題をいただいておりまして、上田市の事例や全国の事例、全国のほうは潮流という形でお伝えできればと思っております。もし、もちろんこれは上田の事例ですので、こうじゃないとだめだっわけでは全くございません。いろんなやり方がある中から上田はこれをチョイスしましたっていうことで、ご参考にしていただけたらと思います。

上田サントミュージゼにも管理運営計画、基本構想に当たるものがしっかりとございまして、その中に基本理念をうたっております。「人にやさしい 夢と未来を紡ぐ 創造都市うえだ」の実現でございます。基本理念の根底にあるのは育成、この育成をととても大切にしております。

人・まち・文化・施設、4つの育成としまして、文化が育つということはすなわち人が育つということを考えまして、まず人を育てて、まちを育てていこう。そのためには文化創造の側面、都市創造も側面などいろいろなことを考えて設定してくださりました。

このようにちょっと今日、トントン拍子でいきますので、詳しくはお配りしました資料ともしご不便なことがありましたら、どなたからでもご質問していただけたらと思っております。

この管理運営計画は、理念に基づく目標としまして、人・文化・まち・施設の4つの育成、それぞれ4つごとに一つ一つにこのように設定しています。

ここで面白いと思うのが人・まち・文化までは分かるんですけども、施設の育成っていうのもありまして、まちと一緒に施設も育てていく、施設と一緒にまちが育っていくというような視点もあって、施設をどう育てていこうかってところ、最初から考えていただいていた内容になっております。

この運営管理計画の中では、事業展開ってイメージをうたっております。「鑑賞」、「創作・発表」・「交流」、3つの活動のイメージを持っていただいております。その下に事業展開のイメージ、ここから具体的には行動、こんなイメージがありますよというようなところを書いてくださった。

例えば、子ども育成事業とかで、文化の芸術鑑賞事業だとか、参加体験事業とか、そこからより具体的に音楽等とのふれあい・交流とか、教育と連携しようとか、様々なフェーズでの事業のイメージをここに書いてくださっております。

実は、ここまでは、僕が勤める前にできていた計画で、これができた段階、できた後、2014年にオープンしたんですけども、2013年度から私、勤めておりますので、ここから私が勤めて実際、行動していった内容となっております。

その管理運営計画、基本構想をいただいて、どのように具体的な事業運営、展開をしていったかというところの話となっております。

重要課題の特定と言いまして、まず最初にやりました、地域課題への把握と整理、様々な地域課題っていうのがございます。それがどのようなものなのか、これはもちろん地域によって大きく変わりますので、このようにいっぱい書き上げて、このような問題があるねということを把握していきました。観光、開発とか産業ですね。もちろん大河ドラマの前でしたから観光というの大きな切り口になっていきます。

そこから新しいホールとの関連性ということで、マテリアリティマトリックスっていうのを作成いたしました。劇場としての活動、それ以外の協力が必要な活動とか様々な視点からカバーしております。

先に、ホール、市の、市役所の人たちとか、関係する人たち、いろいろな方にお話を聞きまして、重要課題の特定を進めてきました。まず、市の文化政策の視点からこのような課題を、イメージを持っていることが分かりました。その中には、都市文化政策、市民文化政策、施設の育成の視点を持って考えていきました。

次は、地域の特徴について調査もしております。県外のほかの公共ホールとの分析ということもしております。

それらをつなぎ合わせまして、活動の枠組みと手段、キーワードというのを整理しております。

最初のほうに出てきましたマテリアリティマトリックスの中で、特に重要なところをこのように切り出しております。

最後に、この文化政策への投資、事業展開していくことがもちろん事業費がかかりますのでこれを投資と考えて、その文化政策への投資というのをどこにリターンを持っていくのかというイメージも作成いたしました。

こういったものを職員で確認して共有していったという作業をしておりました。もちろん事業リスクの把握なども進めております。

その上で、事業をどのようなものを具体的にやっていこうかということを考えました。2つの大きな柱を設定いたしまして、1つは「芸術家ふれあい事業」とタイトルを付けました。これは私が入る前から実はタイトルがあった事業です。2つ目が連携・提携事業。

芸術家ふれあい事業のほう、役割を重視した活動をしていこうと。連携・提携事業のほうは大ホールをいかに活用していくのかっていうところを、鑑賞事業を重視した活動と考えております。

まず、芸術家ふれあい事業です。音楽、演劇、ダンス、様々な分野でレジデントアーティストという形をとりまして、アーティストもずっと住んでいただくわけではないんですけども、1年間の間に複数回来ていただいて、市民の皆様と馴染んでいっていただくこと。そこから様々な

活動を生み出していこうという事業で、音楽、演劇、ダンスのジャンルに取り組んでおります。

音楽事業はどのようなことをしているかという、地域プログラム、そこからホールプログラム、創造プログラムのほうにしっかりと事業をつなげていくという作業をしております。これによってスタッフが今、この企画は何をしているのかというのを把握しながら運営していくことができるということになっております。このような活動ですね。地域からホール、ホールから地域へ、地域からホールへと、様々な活動でやっております。小学校のアウトリーチ、地域コンサート、最後にホールコンサートですね。

ちなみに小学校のアウトリーチコンサートは、5年生がクラスでコンサートをしておりまして、市内の25校の50のクラスの5年生に必ず年1回届けるという形をずっと続けておりました。地域コンサートのほうは、このように市内の中央公民館に必ずお届けすることと、定住自立圏ということで隣町にもお届けをしてきました。

演劇、ダンスのほうは、レジデントカンパニーといたしまして、滞在型事業で2年間ずっと通っていただきまして、1年目はワークショップと市民参加型公演を実施いたしまして、2年目はワークショップとそのカンパニーのオリジナル公演を制作するという形をとっております。このような作品をつくっております。

もう1つ、演劇、ダンスのほうで演劇のほうでは高校生がつくる実験的演劇工房というのがありまして、こちらのほうでかなり高校生が大活躍をしてくださいます。こちらのほう、美術館を活用したりつくっております。

創作活動の中では、地域のネタ、地域ネタを活用しまして、かなりの地域のネタというか地域の資源を活用しまして作品づくりを直接つなげていってる。こういった作品が、つくった作品がサントミュージゼで創作したのが全国展開していくところもなんとか実現することができておりました。これによって上田の文化っていうのは、全国に発信できるのではないかなというふうに思っています。

最近、YouTubeでの動画配信などに力を入れていたり、活動の可視化。あと「まちなかアートプロジェクト」としまして、まちを育てる、市内の中心市街地の活性化ということで、まちなかにもかなり出かけております。

連携・提携公演のほうでは、群馬交響楽団さんとか、新国立劇場さんとか、そのほか、いろいろな劇場さんと連携を組みまして、このような大きな作品を呼ぶことを目指しております。実現しておりました。

このような、こちらが助成金の視点という、こういったところの生産性ってこういうのもとても大切にしております、これはオープンデータです。文化庁さんの資料を引っ張ってきたものです。助成金というところも頑張っております。

この項までが上田の事例なのですが、すみません、かなり足早で。

ここからは全国の公共ホールの潮流といったところを見ていきたいと思っております。

公立文化施設と社会の変化という視点で見えております。公立文化施設と社会の変化、この私の視点としましては、この3つの時代に分けて考えています。1950年から90年代、2000年から2010年代、2010年代後半からに分けています。

公共ホールというのは全国でたくさん造られてきました。1950年代から70年代の公共ホール

というのは、多目的ホールの時代と呼ばれていまして、中規模・大規模ホール、多目的ホールが多い時代でした。このときは鑑賞事業っていうのが非常に多い時代でした。

1980年代から90年代、この時代というのは専門ホール、コンサートだけを目的した専門ホール、例えばオペラハウスだとか、演劇小屋っていうような専門ホールと言えば全国で造られてきた時代です。この時代、舞台が施設がハイスペック化などしていきます。バブルの影響もありまして、海外オーケストラや海外オペラなどの招聘もございましたし、自分たちでオペラをつくるって自主プロデュースオペラっていうのもこの時代から始まってきたものです。

2000年代に入りまして、ここから次の時代に入ります。2000年代はバブルもはじけて、公立文化施設の設置数、建設されていく数っていうのも大きく減っていく時代になります。一方で中核市、県とか政令市という大都市圏ではなくて、20万・30万都市、10万都市とか中核市と言われる中でも造られるホールもハイスペック化をどんどんしていった時代であります。この時代、やはりバブルの後遺症もあるんですかね。海外オーケストラや海外オペラの招聘っていうのは減っていきます。代わりにアウトリーチとかワークショップといった活動というのが増えてまいりました。

アウトリーチ、ワークショップのスタートとしては、最初はこんなに、例えば僕は音楽専門なんですけど、「こんなにオーケストラって楽しんだんだから、もっと音楽のオーケストラの良さを知ってもらおうよ」、「だからホール持っているだけじゃだめだ。届けていこう」、「そこで観客を楽しんで知ってもらおうというような活動から始まりました」と言われております、国内ではですね。

この2000年代には、公共ホールの周辺では、地域のアウトマネジメントっていうような新たなキーワードも醸成してきました。

2010年代、さらに進みますと、ここからちょっと詳細に分けていっているんですけども、一つとして設置目的が重視され、社会的な役割の意識が向上した。ソフトの多様化と進化、まず2010年代の設置目的が重要視され、社会的な役割への意識が向上したというところでは、60年代のホールの建て替え需要がこの時期から始まりまして、建て替えるためにはなぜこのホールを造るのかっていうことが問われるようになってきた。スペックが高いものを造るのではなくて、ダウンサイジング、維持費を意識したダウンサイジングとして何をやるかっていうことを明確に定まっていますので、それに合わせたスペックづくりというのがやってきました。

ソフトの多様化と進化というところですが、アウトリーチのワークショップの多様化と進化。先ほど言いましたように、アウトリーチっていうのは、スタートはやっぱり観客拡大っていうところが大きな役割でした。今でもこれは役割を持っていると思います。そこから2010年代に入りまして、コミュニケーション重視っていうアウトリーチも出てきました。そこから一緒に想像力っていうのを発想力を育てていこうよ、そこからもっと活用してアクティブラーニングに活用していこうよというような活動に、アウトリーチも多様化してきました。これ変化じゃなくて多様化というところが面白いと思います。

次に、地域からの発信です。1970年代とか60年代・80年代くらいまで、東京からの発信っていうのが重視されていまして。そのときは、東京というのは、最先端で優れているという発想で、地方というのはそれを受信するものだよ、遅れているんだっていう発想だったんですけど、今の

時代、こんなことございません。全国からどこからでも発信できる、全国の各地域の素晴らしいものを発信していける時代となってまいりました。

一方で、ここはちょっと歴史とは別なんですけど、エンターテインメント型の施設ということで、2,000席を超えるようなホールもどんどんできてきております。ちょっとここは割愛させていただきます。あと助成金のプログラムの変化っていうところも大きくあります。この辺りも一気に割愛させていただきます。

ただ、全国の公共ホールスタッフたちが大事にしているこの本があるんですけども、この中で「文化政策はもはや芸術文化のためだけのものではない」と。狭義の文化政策、広義の文化政策っていうところ詳しくはちょっと読んでいただきたいと思いますが、このようにアートを起点としたイノベーションが実現したような時代が到来していると。芸術・文化のクリエイティビティを活用して、文化政策を起点に日本を刷新していくというようなことの提言が2008年に行われました。ここが大きな転換期になったのではないかなと思っています。それで現在、芸術・文化とサステナビリティということになっております。

ここが今、私たち、ここまでずっときましたけども、公共ホールの運営者の中で僕も友人が全国に多いんですけども、彼らがとても悩んでいることです。常に、最近苦しんでいることです。まあ楽しんでいと言いますけれども。

公共ホールに期待される役割というのは、このように1950年代から今まではばっと潮流があったように、最初は芸術性だとか興行というようなものでした。以前からあった役割と私は考えております。芸術性と興行。多目的の全国の鑑賞事業が多かった時代と専門ホールができてきた時代、これが以前からあった役割です。

近年になって新しく求められるようになってきた役割っていうのが、社会的な役割と効率的な運営っていうところだと思います。

左側の興行と効率的な運営っていうのは、数値で評価できるもの。右側の芸術性と社会的な役割っていうのは、数値っていうのは評価はできないものです。

これを私たち公共ホールの仲間たちとよく言っているんですけども、芸術性っていうのはフォー・アート、逆に社会的な役割っていうのはバイ・アート。興行っていうのはエンターテインメントですね。効率的な運営はマネジメントと書いております。

ただ、この興行っていうのは、全国からの発信もありますし、発信もあれば受信もある。なので、全国というのはある程度、共有していくものなんですけども、やはり私たち一番難しいと思っているのは社会的な役割のところなんです。なぜかって言いますと、自分たちで設定しなくちゃいけない役割なんです。上田は、先ほどのように、私たちはこの館でこう実施しますっていうところを必死に考えて整理をして、調査をして整理をして考えて活動していった。

ほかの興行事業のように、同じものを全国で回すこともできないんですね。そこで造るしかない。しかも芸術がテーマじゃないといけないっていうところ、芸術文化がテーマじゃないといけない。エンターテインメントの買取り公演っていうのはすることはできるのですが、この辺りが非常に難しい。

効率的な運営、マネジメントというのは指定管理から直営館に帰ってくる動きっていうのが全国で多くありまして、このマネジメント、効率的な運営っていうのは何なのかっていうところも

大きく考えていかななくちゃいけない。

これをちょっと違うビジュアルで整理をしてみました。1990年代の以前にあった活動です。舞台っていうのは、無関心層までとっておいて、一部の関心を持っている人、その中でも見るのを専門にしている人、ここで発表することを専門にしている人、もちろん両方やる人もいるんですけども、その人の中に公共ホール、舞台っていうのがあるんだと。また、社会的な役割っていうのも持ってくると、この無関心層の人たちにいかに近い存在を持っていくのかっていうのを、そんな場合、公共ホールっていうのはこの中心地に持っていきかかっていうことが大事だと言われていきます。

これがどれか一つに絞れたらとても簡単だと思います。今の公共ホールは、この4つ全て果たしていかないとだめだということ是非常に難しい。なので、公共ホール業界でよく言っているんですけど、昔のホールスタッフより今のホールスタッフのほうが遙かに忙しくなっているという。これはなぜかかっていうこと、こういう役割が増えていたからです。

最後に、ここに戻ってまいります。公共ホールっていうのは、まちにとって大切なものです。そこに文化事業があるのであれば、それは文化政策への投資だと僕は考えています。そのリターンがどのように返っていくのか。枠は4つの枠組みに揃えて、今までお話していたのを軸に4つに分けてありますが、それぞれに全てにリターンをつくっていかなくちゃいけないと。ここが生産性、ここをどう図っていくのか。もちろん数値で計れるものもあるんですけども計れないものもある。ここをそこまでの事業評価っていうところでも考えて、どのような事業をつくっていくのかっていうのが、近年の公共ホールの課題となっております。

この辺り、ここまでとなっておりますが、すみません、僕もなかなかまとまりついていず、このようにじゃあどういった活動が必要かかっていうと、やはりそこを自分たちで設定しなくちゃいけないということが非常に難しく楽しいこともあります。

私からは以上になります。

(拍手)

○下井(事務局) ありがとうございます。

それでは、この後で班ごとになるわけですが、その前に学識委員のほうでコーディネーターで少しまとめをしていただくとありがたいと思いますが、前のほうへちょっと出ていただいて、お願いしたいと思います。

○○委員には、本当にこの分量はどう見ても本当にどうでしょう、2時間コースっていうようなものをわずか10分・15分でお話をいただきました。ありがとうございました。

それでは、○○先生よろしく願いいたします。

○学識委員 ○○委員、○○委員、どうもありがとうございました。

最初に言い訳をさせていただきますと、私もこの話は今、初めて聞きました。特に事前に申し合わせがあるわけではありません。

その中で、時間が限られておりますので、私なりに、もちろん正しく理解できていない部分もあるかと思うんですけども、今のお話をお伺いして感じたことを述べさせていただいた後、それぞれの委員のお二人からワークショップの進行に向けて、一つ二つ具体的なアイデアというか、視点の投げかけをしていただければなというふうに思いました。

まず、私が今お二人の委員の話聞いて一番感じたのは、「飯田のこれまでとこれから」という話になっていますが、もうこれまでの段階でも既に飯田というのはかなり時代の先端を行っているんだなということ、私自身は感じました。あるいはそれは、飯田なのか、あるいはこの委員会での皆さんの議論という言い換えもできるかと思いますが、かなり先端を行っているということの一つ感じました。

〇〇委員のお話をお伺いした中でいくつか私も勉強させてもらったことがあるんですけども、私なりの解釈として述べさせていただきます。まずは外の文化を取り込んで定着させてきたという、飯田ならではの文化の吸収と展開という、「飯田らしさ」というもの。

それから、2つ目、1つ目との関連で語られていましたけれども、日常と文化とのつながりというもの。文化というものが人々の暮らしや日常につながっているというのも「飯田らしさ」であるというようなお話があったかと思います。

それからそれとも絡むものとして、プロ、あるいは専門家とのつながりということ。飯田の文化というものが、プロや専門家とのつながりで発展してきた。これは上田の事例の中でもレジデントアーティストであるとか、芸術家ふれあいレジデントカンパニーというような形で、そういったことが様々な近年の事例としても展開していたということかかと思えます。

そういったことを受けて、そういった文化をどうやって広げていくのかという視点。これが非常に重要であるということも今後の飯田の文化を考えていく上では重要なのかかと思えますし、先ほどご指摘があったこととして、「住民・行政・企業がきちっとそれを支えるということも、文化が発展していくためには重要なんだよ」という話があったかかと思えます。

そういったものを全てひっくるめた「飯田らしさ」というものとして、市民一人一人が文化の担い手という、これは皆さんの議論の中でもこれまでも繰り返し出てきたことかかと思えますけれども、そういったご指摘があったかなというふうに思えます。

〇〇委員の話の中で最後の部分で、私が非常に印象の中で言えば、「ありのままの伊那谷」というお話がありましたけれども、結局、今日皆さんの議論の一つのベースになるのは、「ありのままの飯田」というものが一体なんなのか。その価値を皆さんはどういうふうに解釈をしながら、〇〇委員に、今、私なりにまとめさせていただいたようなことを、「ありのままの飯田」として展開するとき、もう少し具体的にどういうことになるのかというのが、おそらく基本構想というもので求められているレベルにつながっていくのかなというふうに思いました。

一方、〇〇委員のお話は、本当に盛りだくさんで困ったなと思いつつ、ずっと聞いていたんですけども、非常にそうは言いながら、〇〇委員の話参照しながら、あるいは当てはめながらやっていくと、結構いろんなことが当てはまっているなというのをまず非常に感じました。全然こっち違う話ではなくて、いろんなことが当てはまっています、逆に言うと飯田で行われていたことってというのは、意味を理解する具体例として聞いていても、非常に参考になるなというふうに聞いていました。地域からの発信ですとか、地域のマネジメント、普及活動、そういったことも飯田の文化の中では、かなり市民一人一人の人を中心に行われてきたんだなというふうに思いました。

そういった中で、アートを起点としたイノベーションであるとか、文化政策をもはや芸術なんかのためだけなものではないというような、まさにこの時代の文化に対するニーズといったよう

なものが、飯田のこれまでの中でも実は展開されてきているということが印象に残りました。

〇〇委員のお話は、本当に具体的でいろいろ中身もありますので、私も後でちょっとこれを参照しながら、また具体的なところは理解をしていきたいと思うんですけども、芸術性と社会的役割は、自分たちで設定しなければいけないということが、まさに今日皆さんがここで「飯田らしい」表現活動、あるいは文化活動、基本構想策定に向けての、「飯田らしい」表現活動、文化活動、これを自分たちで設定をする。それは「ありのままの飯田の芸術性」や「ありのままの飯田の社会的役割」というような言い換えもできるかと思えますけれども、そこを皆さんに議論していただきながら、まさに今まとめていただいたことを、どうでしょう、具体性のレベルとしていわゆる「ありのままの飯田」、「飯田らしさ」というのを具体性のレベルとして1段階か2段階掘り下げていくのが、今日のラウンドテーブルも目的になるかなというふうに思っております。

ちょっと時間も、ラウンドテーブル開始の時間になってしまったんですけども、最後にラウンドテーブルの前に、〇〇委員と〇〇委員にこのラウンドテーブルを皆さんで議論するに当たって、何かヒントになるというか、その視点として役に立つというようなことがあったら、一つ二つぐらい挙げていただければと思います。

急な振りで恐縮ですけども、お願いできますでしょうか。よろしくお願いたします。

○学識委員 そうですね。私からはフォー・アートとバイ・アートの話をしたかと思うんですけども、私もこういう企画を考えるときにフォー・アートってとても自分の中でどんどん構築しやすいですよ。でも、バイ・アートってなると、なかなか目標が自分の中に入ってこないの、相手の、まちのとか相手のとか入ってきますので、そこでかなりやっぱり私は過去、苦しんできた経験がありますけど、苦しんできたって表現になりますけど、楽しんできた経験でもあります。

このアートの力っていうのは、自分が信じているからこそ、これを誰に、どのように、この街でというふうに考えていくと非常に楽しくなるんじゃないかなというところを、自分の実体験の中から思っております。

すみません、まとまってきません。

○委員 今、ちょうど〇〇委員さんのほうから、良いお話が出たと思うんですが、私は全く文化の専門でも何でもなくて、仕事としてただ紙切れ一枚で関わったものですから、やっぱり行政の職員がこれやるのは大変だなんていうのはずっと感じてきたところです。

お話にうまくヒントになるかどうか分かりませんが、やっぱりこれから飯田で今までいろんな今日の事例も含めて、市民の皆さんが全て担ってきた部分があるんですが、それをもう一歩前へ進めるために、ある程度専門的な体制というのは必要なかなっていうことも、ちょっと皆さんどういうふうにお考えか、そこら辺もお聞きしてみたいなというようなことを思っています。

どうもまとまりませんが、そんなところでお願いします。

○学識委員 どうもありがとうございます。

論点整理、あまり整理にはなっていないかもしれませんが、時間もありますので、以上を論点整理とさせていただきます。

○筒井（事務局） ありがとうございます。

それでは後半のワークショップのほうに入りたいと思いますので、ステージの皆さんありがと

うございました。それぞれ班にお戻りいただきまして、ここからは自由な意見交換ということでお願いをしたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

事務局の職員も記録係として入っておりますので、一緒に班ごとのワークショップ・意見交換のほうをこれから約25分ぐらいをかけて、意見交換をしていただきまして、その後、班ごとで発表をしていただきたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

(ワークショップ)

○筒井(事務局) そろそろお時間になりますので、発表をしていただける方は各班、大丈夫でしょうか。職員の皆さん、大丈夫ですか。決まっていますか。

OKですね。

まだまだご意見あると思いますけれども、一旦ここで発表の時間に切り替えたいと思います。

それでは1班から発表をお願いできたらと思いますので、よろしくお願いいたします。

○1班委員 はい、ありがとうございます。

初めての人にやりなさいという非常に優しい班であります。

すみません、ちょっと私十分にこなれてないところがあるんですけども、「飯田らしさ」、「ありのままの飯田」って何だろうっていうところから話を少し深めていったんですけども、どうやらこの図(発表資料)にあるんですけども、真ん中に「ありのままの飯田」っていうふう書いてあるんですが、飯田の今までやってきたことは先ほどのお話にもあったんですけど、今までなかった外のものを取り入れて、そしてそれを自分たちなりに工夫しながら守りながら続けてきて、そして少し付加を付けながら外へ発信するっていうようなことを大事にしてきたのかなど。例えば、ちょっと私が例に出したのは、喬木村の阿島の傘みたいなものもそういうものかなっていうこともちょっと話をしましたし、それから人形劇やその他伝統芸能、そんなものもそうなのかなっていうことを話をしてきました。

それでちょっと話題になったのは、じゃあ、リニアが来たらこの構図はどうなるのかなど、その話が話題になりまして、おそらく今までよりも距離的にも時間的にもうんとそういうものが広がってきて、もしかしたら今まで以上の大きなものがいっぱい入ってくるんだろうな。でも、おそらく飯田は、今までの飯田スタイルを維持できるのではないかなっていうようなことが話題になりました。

1つ目、飯田の文化はいろいろ変わっても継承されていくのではないかなっていうことが1つ目の話題でした。

2つ目でありますが、じゃあ、そういったものをどのように大事にしていくかってことなんですけれども、やっぱり一人一人が文化の担い手であるっていうことを、自覚持っていくっていうことが大事だと思うし、元々飯田には「ムトス」っていう言葉があるんですけども、とにかく自分たちでやっていこうとか、自分たちで大事にしていこうっていう、そういう意識がうんと根付いているので、その辺りきつと「飯田らしさ」っていうことにつながっていくのではないかな、そんなところまで話になりました。ちょっと結論としてまとまっておりますけれども、許していただけますか。

はい、以上でございます。ありがとうございました。

(拍手)

○筒井(事務局) ありがとうございました。1班でまとめていただいたことを発表いただきました。

ありがとうございました。

続いて、2班の発表をお願いいたします。

○2班委員 2班の〇〇です。

この班では「飯田らしさ」というよりは、今までの飯田の活動はどうだったのか、それとそれからどう進んでいくかということで、いろいろ例が出て話をさせていただきましたけども、飯田では今までは、結構、日本の中でも先端を行ってるような動きがあったんじゃないかということで、よそからのいろいろな伝統文化等を取り入れたりして、それを飯田なりに発展させてきているんじゃないかと。良い例が獅子舞なんか、三河地区とか伊勢のほうから伝承されて、それが飯田としての今30団体ほどある獅子舞の活動になっているんじゃないか。最近では、和太鼓が非常に盛んになっておりまして、私も携わってるわけですけども、30年ぐらい前には2つ3つの団体しかなかったのが、今では40、50の団体ができていると。そしてそれを指導する方たちが、これも飯田の方じゃなくて、遠くは沖縄、もっと遠くはアメリカの方がプロとして4名、私の知ってる範囲ではいらっしやって、ここに住み着いて地域の方に指導をしながら、日本全国または世界を飛び回って活動をしていると。これが非常に地域性としては珍しい地域じゃないか。これが「飯田らしさ」かなということで、その指導者たちもこの地域の方たちの温かい心が、そういう方たちを受け入れて、住みよいところじゃないかっていうことも言えるんじゃないか。そういったことなんかが、これからもそれは続いていくだろうし、大事にしていくべきじゃないかなということ です。

それで、これからどうしていくかっていうことの中で、いろいろ文化芸術に携わっている人たちが、今の現状で満足して、非常に楽しんでるなという方もいらっしやるし、それだけでは満足できなくて、もっとレベルアップを狙っていると、そういう方はどんどん飯田から出ていっているわけですけども、それをうまく取り込んで、どんどん満足している人たちも少しでもレベルアップしていくように、専門家の方、プロの方たちとの交流が、これからリニア等が開通すれば、身近になって、そういう人たちとも交流ができるんじゃないかということで、そういった点を大事にしていって、今の飯田の文化・芸術をよりレベルが高いものにしていく橋渡しとなるのが、飯田文化会館、新飯田文化会館の役割になってくれれば良いかなということで、そういう話が出て、まとまりが付きませんが、そういう状態になりました。

以上です。

(拍手)

○筒井(事務局) ありがとうございました。

続いて、3班お願いいたします。

○3班委員 3班ですが、実は提供してくださった先生と〇〇さんと、あと〇〇さんが途中で退席されたので、意見が私だけという形ですけども、ほぼ私の思いというか意見になっています。

私自身の感じたところでは、今日のお話の中では一番はやはりバランスをとらないといけないんだらうなっていうのを思いました。もちろん市民の意見や思い、それからいろいろ芸術等のそ

の話全部受け入れてしまっても、どこかで偏りが出てしまったりするだろうしってところは、意見も聞きながらも市民と飯田の地域性を考えながら、バランスをとった文化会館を造らないといけないのかなっていうのを感じました。

それから〇〇先生から「公共のものはつくるものではなく、なっていくもの、多分実になっていくものだと思います」、それを教えていただいて、そのとおりだなと。みんなの意見を聞きながらも、それを一つ一つ実を大きくしていく、それが市民の皆さんの気持ちであったり、思いを持っていくのかなあっていうところを感じました。

ありがとうございました。

(拍手)

○筒井(事務局) ありがとうございました。

続いて、4班お願いいたします。

○4班委員 すみません、4班、〇〇ですが、今日、初めてこの会議に出させてもらったんですが、発表しろということちょっとつらい面もあります。

4班で一番初め、高松さんがちょっと口火を切ってくれまして、「飯田らしさ」って何だと。「飯田らしさ」、「飯田らしさ」、「飯田らしさ」って言われても、良い面もあるし悪い面もある。それが全部出せる、どうするんだよと。高松さんはここじゃない形でここへ来たということもあるんで、本当に全部が「飯田らしさ」が良いことばっかじゃないってところがありまして、そんなことで「飯田らしさ」の良いところを今後出していかなきゃいけない、良いことと悪いことを分けて、良いことを出していかなきゃいけないということで話を進めていきまして、ちょうどフェスタの時期でございますので、フェスタのお話になって、なぜカーニバルが20年、それからフェスタが25年近く続いているというのはどういうわけかなって話になりまして、カーニバルの場合はわりかし行政が主導してやってきていて、問題があることじゃないですけど、そこまできて、20年過ぎたから止めるというときに、また今度は行政じゃない、一般の人たちがここで続けていかなきゃいけないということで続けたという話の中で、でもその後は、やっぱり行政が後ろでバックアップをしてくれたんだからできたんだというようなことで、やっぱり行政が前へ出たらやっぱり育っていかないって、今、話になりました。

それと、やっぱり飯田市でも、丘の上と合併してできた村部の方とのやっぱり考え方の違いもいろいろあるんじゃないかということがありました。これからちょっとまだ話が盛り上がってくるときにちょっと終わってしまったんで、そのぐらいのところで勘弁願います。

ありがとうございました。

(拍手)

○筒井(事務局) ありがとうございました。

最後に5班の発表をお願いいたします。

○5班委員 5班の発表です。

面白い方たちが集まった5班で、楽しいお話を聞かせていただきました。

文化ってちょっとかっこいいとか固いとか言葉ですけど、結局、遊びじゃないかと、楽しいことじゃないかと。そこからちょっと離れちゃうと続かないんじゃないかなって、簡単に言っちゃうとそうかなと思っておりました。

やっぱり文化や芸術を行政がバックアップしてくれて、まちづくりになる、ひとづくりになるってことはすごく大事ですが、もしかしたら事業だとか、なんか施策だとか、そういう難しいに言葉に入っちゃうと、例えば関心のない方、興味がない方はあまり意識を向けてくれないけど、なんか飯田文化会館っていうところに行くと、例えば面白いおじさんお婆さん、面白い人、すごい人、特別ちょっと憧れちゃう人とかいて、そこに行きたくなるとか、そこでやっていること自体が面白いから文化会館に行きたくなる。そうすると議論が生まれたり、創造が生まれたり、良い言葉で言うと文化芸術ができあがるっていうふうになっていくのかなっていう話をしたような気がします。

その中の一つでどうしても言ってください。カリスマおじさん、カリスマお婆さんがいると良いなって、そこをまず育てることが飯田の文化につながるのかなっていう話があって、私はそれを聞いたときに、今でもきつとさっきの太鼓の話じゃないですけど、結構、飯田にプロの方たちが定住されて、本当に太鼓もそうだし、ミュージカルの方もそうだし、ピアノの方も、歌の方も、ギター演奏する方、器楽、いろんな芝居もそうなんかちょっと言い切れないんですけど、多くのジャンルのプロが飯田に住んでいらっしゃいます。そこはやっぱり飯田にどこか魅力があって、飯田の人たちがそこに付いていくのかなと思って聞きました。でも、そうはいつでもまだ広がってないんだろうと思うので、人づくりっていうところを大事にしながら文化会館の構想ができたら良いなと思います。

あともう一つ、私がここの話じゃなくて、ある人とパンフレットとかニュースレターとか持ちながら、いろんな人としゃべってるんですけど、ある方が「音のあるところに館をつくってほしい」って言いました。「どういうことかな」言ったら、やっぱり前回お話があってさっき1班でも例を出して下さっていましたが、「館ありきじゃなくて周りに広場がある。そこにいつも人が集ってて、いろんな人が遊んでも良いし、歌でも良いし、ギター弾いても、お茶飲んでも良いけど、楽しく遊べる場所、そこに音とか芸術文化あると、人って自然に集まってくるんだよね」って話があって、「ポツンと館が何でもないとこにあっても人来ないでしょ」って言われて。「ああ、そうですね」って思いました。「そういうところが文化会館1個じゃなくて、いろんなとこにあると本当はいいんだよね」って言われました。

そのときに私、ちょっと思ったのは、これはちょっと個人感情になっちゃうかもしれませんが、「あれ、それって飯田の創造館がそういう場所になっているじゃん」と思って、庭があっというんな自然の木があっという、野外ステージがあっという、中に特別ないろんなジャンルの部屋があっという、ホールみたいな部屋もあっという、ステージである部屋もあっという、そういうところが1つあっという、また文化会館がさらに違うジャンルの箱になったら良いなんて思ったんですけど、まあまあとにかく、遊びが大事っていうところがこの何かしらとかパンフとか大事な思いの中にポーンと盛り込まれたら良いなって話でした。

こんな感じです。

(拍手)

○筒井(事務局) ありがとうございます。

お時間があればもう少し意見交換を続けたいと思っておりましたけれども、ちょっと予定の時刻に迫っておりますので、もし皆さんの中で今の発表を聞いていただいて、ここだけはちょっと

発言しておきたいなっていう方がいらっしゃれば、発表していただければと思いますけれども、いかがでしょうか。

(発言する者なし)

○筒井(事務局) よろしいですか。

それでは、委員長。

○委員長 ありがとうございます。

進行を交代します。

それでは、本日の振り返りとして学識委員の皆さんからコメントをいただき、オブザーバーから感想をいただきたいというふうに思います。

嫌な顔をしている人が約1名いますけれども、それでは時間の都合で2分程度でお願いしたいと思いますが、まず〇〇学識委員良いですか。よろしくお願いします。次に〇〇さん。

○学識委員 〇〇です。

今日、長々とお話してしまいまして、申し訳ございませんでした。

今、発表、お話を聞いていて、前回実は予定があつてちょっと委員会欠席してしまったんですけども、お話がどんどんどんどん成長してきているなど、前に進んでいる、おられるなどというのを実感いたしました。

ここで本当にこういった会議で話し合っているっていうのが本当に、この委員会としての積み重ねになっているんだなっていうのを実感させていただきました。これからも今「飯田らしさ」っていうのはどこにあるんだろうっていうお話を3班でしておりまして、でも自分の住んでいるまちのらしさを見つけるのって実は難しかったですので、明日からまちを歩かれる際にふと何か新しいものを、そのまちの中にある普段のものなのかもしれないですけども、新しい見方で発見してみてはいかがでしょうかと提案させていただきます。

皆様、ありがとうございました。

(拍手)

○委員長 ありがとうございます。

それじゃ〇〇さんお願いします。

○学識委員 皆さんお疲れ様でした。

今日は私は、話を聞いてるだけだったので、とっても楽なあれだったんですけども。

本当に「飯田らしさ」ってか、毎回この会議の最後に言いますけれども、皆さん本当に活発に意見をお話される。これも本当に「飯田らしい」特色だと外から来た人間にとっては、本当にこれはもうほかのまちでは考えられないことであつて、まさに「ありのままの飯田」というか、「飯田らしい」ところだというふうにも思っています。

何でしょうね、皆さん多分その中にいらっしゃって気づいてらっしゃらないこと、さっき〇〇さんもおっしゃいましたけれども、とても何でも受け入れられる地域柄でありながら、ただどっかではやっぱりこだわりが非常にあるまちじゃないかっていうふうにも、一方では、そういうふうに思います。私も15年以上飯田にずっと毎年通っていますけれども、外から来ると本当に気持ち良いんです、この飯田に来るっていうのが。なんだけれども、どこかでは皆さんが厳しい目で見るところもあるんじゃないかっていうふうに、いつも恐れおののきながら過ごしたという

ころがあって、「飯田らしい」っていうのがそういうところですけども、本当にこれから具体的にホールの話になってくると思います。また、いろいろと皆さんの意見をいただきながら、一緒に考えていければなというふうに思っております。

ありがとうございました。

(拍手)

○委員長 ありがとうございました。

それでは、〇〇さんお願いします。

○学識委員 皆さんどうもお疲れ様でした。私も今日は結構疲れしました。

そういう中で、最後の発表を聞いていまして感じたことをちょっと簡単に述べさせていただきます。

まず1つ今日、私自身非常に勉強になったのは、取り入れ、定着させ、それを発信するというのが、これまでの飯田の文化を醸成して、飯田の文化として展開していくやり方であった。それは今の時代の文化のありようっていうのを見てみると、実は非常に先端を行っている文化との関わりがありようであって、飯田というのは歴史的にそれをやってきたというのは非常に勉強になりました。

まあそういった中で、それをじゃあどういうふうに育んでいく必要があるのかという辺りに関して、皆さんの発表の中で市民主体、行政がバックアップするといったようなこと、あるいは「カリスマおじさん」、「カリスマおばさん」というような話も出てきていましたけれども、人づくりということ、一人一人が文化を支えるということが非常に重要であると。そういうことをやっていけば、文化っていうのはまさに公共施設っていうものを一つの場としながら、実がなっていくものですよと、実っていくものですよ、すなわち飯田の文化として結実をしていくということだと思っんですね。それは、今まで飯田の中で行われてきたということなのかなというふうに思いました。

そういう中で、当然今日の議論、時間が限られていった中で、市民や地域が文化芸術とどういうふうに関わっていくのかっていうところが、もう少し具体化できるような時間と議論の場があると、さらにこういった「飯田らしさ」っていうものを実現していく、より具体的な基本構想というようなものにつながるのかなというふうに思って、本日の議論を聞かせていただきました。

どうもありがとうございました。

以上です。

(拍手)

○委員長 ありがとうございました。

じゃあ、続いて、オブザーバーとして参加いただいた〇〇さん感想をお願いいたします。

○オブザーバー どうも〇〇でございます。御苦労さまでございます。

今までも出ていなかったかもしれないし、今日も出てなかったかもしれませんが、「飯田らしさ」の中に、市民、いわゆる表現者と文化会館、行政との得も言われぬ関係っていうのがあります。これは〇〇さんがよく分かっていると思う。要するに今日、文化会館の人がいるから言うわけじゃないんだけど、よく頑張っている、本当に。ものすごい頑張っている。この方々のサポートがあって初めて表現者たちが伸び伸びとできていると。このことは「飯田らしさ」の大きな特徴だとい

うふうに思っています。

このことを絶対に保証していくためには、さっき〇〇先生からお話があったとおり、直営館でないだめだと思うんですね。指定管理では。

ちょっと非常に行政っぽい話になっちゃって申し訳ないんですが、割合そういう文句を立場にいるもんですからあれですけど、やっぱりこれからも直営館でいくべきだなというふうに思っています。非常に冷たい話で申し訳ないんですけど、そんな感じがしています。

というのは、ここに集まっている皆さんとか、新しく造られる文化会館というのは、個の表現者ではなくて人のつながりで表現してますよね。それは表現者同士のつながりもあるけれども、表現者とそれから文化会館、要するに管理している人たちのつながりがあって初めてできているということでもあります。このことが非常に特徴的なことが、伊那谷文化芸術祭の運営であり、オケ友の運営でありということだということは、関係者の人はよく分かってますので、このことを絶対、保証していただきたいなというふうに思っています。

以上でございます。

(拍手)

○委員長 ありがとうございます。

それでは最後に、事務局の秦野次長から本日のまとめを含めて、次回に向けてのご発言をお願いします。

○秦野(事務局) 本日はどうもありがとうございました。

今のアドバイザーの〇〇さんからもお話があった話、実はここは出ておまして、文化会館との関係性とかいうお話をさせていただいておりました。また、公民館が支えてきて、公民館のあり方みたいな話も実はここでは出ておまして、私がいたからということではなくて、皆さんの中から出てきたというところもあります。

一方で、「まだ議論が足りない」というお話もありました。ここが出发点ぐらいのどこかなと。もう少ししゃべりたい、「飯田らしさ」というよりも「飯田の良さを見つける」というようなところも必要なんじゃないかというふうに、私がいたところのグループの皆さんはおっしゃっておまして、さらに議論を深めていく必要があるんだなと。「まだ入り口の段階に立っただけではないのかな」というようなご感想も漏れておりましたので、またちょっと事務局サイドで今日のお話をまとめさせていただいて、まとめると言いますか確認させていただいて、次につなげていきたいなというふうに思います。

とても活発なご意見をいただいております、「まだまだ時間が足りない」というお話がありますので、もう少しちょっとまとめさせていただいて、次に続けさせていただきたいなというふうに思っております。

本日は本当にありがとうございました。

(拍手)

○委員長 はい、ありがとうございました。

本日予定されておりました議事は以上となります。

委員の皆さんにはお疲れ様でした。またご協力いただきありがとうございました。

次回以降も積極的にまた脳みそ働かせていただいて、活発な意見をよろしく願います。

---

#### 4 事務連絡

○委員長 最後に事務連絡を事務局から申し上げます。お願いします。

○筒井（事務局） はい、事務局筒井です、

長時間に渡りましてありがとうございました。

本日の委員会ですとか今後の進め方に関しまして、ご意見等をぜひお伺いしたいと思っておりますので、本日お配りしておりますアンケート用紙でも結構ですし、メール等でも結構ですので提出いただければと思います。

また次回第7回の整備検討委員会ですが、7月7日金曜日に今度は文化会館で開催したいと思っておりますので、今から日程の調整をお願いしたいと思います。

なお、今回、今日ご紹介できませんでしたけれども、〇〇先生の学生さん3名、今日傍聴でお越しいただきましてありがとうございました。また、機会がありましたらぜひ飯田にも、今日だけではなくてずっと関わっていただいておりますけれども、この文化会館の検討にもぜひ顔を出していただけたら嬉しいなと思っております。

以上となります。

○委員長 はい、ありがとうございました。

---

#### 5 閉会

○委員長 それでは、以上で第6回飯田市新文化会館検討委員会を閉会といたします。

お疲れ様でした。ありがとうございました。

---

閉 会 午後 9時02分